

日本近代文学館所蔵・芥川龍之介「葛巻義敏あて指示・依頼メモ」資料の翻刻と二部解題
——「長江游記」、「侏儒の言葉」、「美しい村」、「Gaiety 座の「サロメ」」など——

小澤 純

小谷 瑛 輔

章 瑋

■はじめに（小澤 純）

二〇一八年、日本近代文学館では特別資料の検索が可能となり、『日本近代文学館所蔵目録2 芥川龍之介文庫目録』（日本近代文学館、一九七七・二）に未記載の芥川龍之介関連資料の調査を稿者は進めていたが、日本近代文学館編『芥川龍之介の書画』（二玄社、二〇〇九・二〇、以下、『書画』）に一部のみ掲載された、芥川から同居者である甥の葛巻義敏への様々な指示を記した「葛巻義敏宛メモ」[T0022137]の存在を知り、概要について拙稿「芥川龍之介「歯車」に宿るアーカイヴの病——日本近代文学館・山梨県立文学館・藤沢市文書館の所蔵資料を関連させて」（『日本近代文学館年誌 資料探索』二〇一九・三）の冒頭で触れた。葛巻は自分宛のメモである点を強調して

文学館に入れており、『書画』にも、原稿用紙の裏面に書かれたメモのみが写真版で載っているが、表面の草稿・書き反故も重要であり、できれば裏面と表面に何か関係がないか探ってみたかった。その後、小谷瑛輔氏と章瑋氏から、同資料について関心があることをうかがい、本誌に共同執筆する運びとなった。日本近代文学館で特別資料の閲覧申請をすると、計九枚の当該資料をまとめていた表紙一枚と、裏表紙と思しき原稿用紙一枚も確認できる。二枚とも表面には左下の欄外に「岩波書店原稿用紙」の印字があり、用紙は未記入である。表紙として使われた一枚の裏面には、葛巻によって墨書で「家庭内に於て／義敏宛／手がみ。」と記され、「葛巻義敏」の蔵書印が押されていた。裏表紙の裏面は白紙である。なお、近年刊行された『日本近代文学館所蔵目録35 芥川龍之介文庫目録増補改訂版』（公益財団法人日本近代文学館、二〇二三・六、以下、『文庫目録増補版』三四頁には、「葛巻義敏あて指示・依頼メモ」計九枚について、以下のように丁寧に記載されている。（縦書きに直し、館内の資料記号を最初に置いた。）

T0022137-1 〈(1) 明貳拾壹日午後〉

和紙1枚 墨書「大正13・10・20夜 『芥川龍之介の書画』 121・34

T0022137-2 〈ハリガミ一枚／リウ大人／ヨシ坊〉

原稿用紙裏1枚（表は「長江游記 前置き」断簡） 赤インク

T0022137-3 〈コノ原稿ヲ「文藝春秋」ノ使者ニ渡サレタシ〉

原稿用紙裏1枚（表は「侏儒の言葉（遺稿）」断簡） ペン書

T0022137-4 〈室内一切手をつけぬ事〉

原稿用紙裏1枚（表は「芭蕉雜記」草稿Ⅰに類似した断簡） 赤インク

T0022137-5 〈よつちゃん大王閣下〉

原稿用紙裏1枚（表は「文藝鑑賞講座」断簡） 墨書 「大正14」 『芥川龍之介の書画』

121-1

T0022137-6 〈封筒を一束買はせにやつてくれ。〉

原稿用紙裏1枚（表は「九月二日。晴。後曇り。〴〵」ペン書

T0022137-7 〈この外にずみひつの原稿を〉

原稿用紙裏1枚（表は「芭蕉雜記」草稿Ⅵに類似した断簡） 墨書 『芥川龍之介の書画』

121-2

T0022137-8 〈この原稿の番号を打ち直し、改造社の使に渡して下さい。〉

松屋青色罫200字詰原稿用紙1枚 ペン書

T0022137-9 〈思想六月号をさがされたし〉

原稿用紙裏1枚（表は「美しい村」未定稿Ⅰに類似した断簡） ペン書

『書画』の石割透「図版解題」には、「T0022137-1」・「T0022137-5」・「T0022137-7」のメモ部分についての説明があり、「T0022137-1」は「養父芥川道章の弟、竹内顕二が食道癌で、一九二四年十月二十日逝去の際に記されたメモ」であり、「T0022137-5」については、「一九二五年（大正十四年）に記されたものと推定」し、メモ中の「戦争と平和」を、「春秋社版『トルストイ全集四、五巻』（一九二五）の内の第四巻か」と推測する。なお、普及版『芥川龍之介全集 第十巻』（岩波書店、一九三五・八）には、「T0022137-2」が書簡番号九一四（稿者注、大正十三年）八月田端、家にて。葛巻義敏宛」・「T0022137-7」が書簡番号九四七（大正十三年田端、家にて。「芭蕉雜記」の原稿と共に。葛巻義敏宛」・「T0022137-5」が書簡番号一〇七一（大正十四年田端、家にて。葛巻義敏宛」・「T0022137-6」が書簡番号一一九三（大正十五年田端、家にて。葛巻義敏宛」・そして「T0022137-8」が芥川最後の書簡の扱いで、書簡番号一二五九（稿者注、昭和二年）七月田端、家にて、「西方の人」原稿と共に。葛巻義敏宛」として収録されている。「T0022137-8」のみ原稿用紙の表面に記している点には、「西方の人」（『改造』一九二七・八）及び遺稿「続西方の人」（『改造』一九二七・九）を完成させていく創作姿勢が反映されているように感じられる。

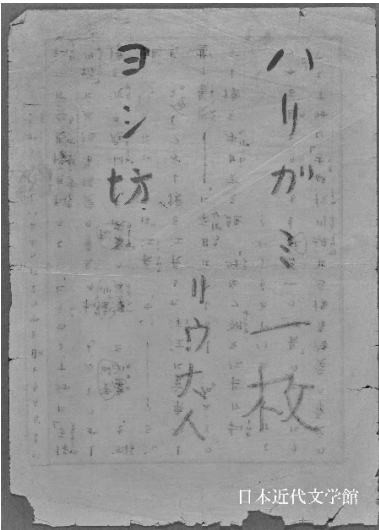
本稿では、『書画』に全容がカラー掲載された「T0022137-1」を除く「T0022137-2」～「T0022137-9」計八枚の原稿用紙の表裏両面を写真版で掲載し、「T0022137-2」にひいては章、「T0022137-3」にひいては小谷、「T0022137-9」については小澤が解題を担当した。他のまだ解題のない資料については、例えば芥川の芭蕉受

容に詳しい諸氏に委ねることができれば幸いである。本稿が図版資料と共に公開されることによって、芥川研究が一步でも着実に進んでいくことを願ってやまない。

■図版及び翻刻（章 璋）

※ 【図版一・二】『T0022137-2』 【図版三・四】『T0022137-3』 【図版一五・一六】『T0022137-9』の翻刻は解題本文を参照されたい。

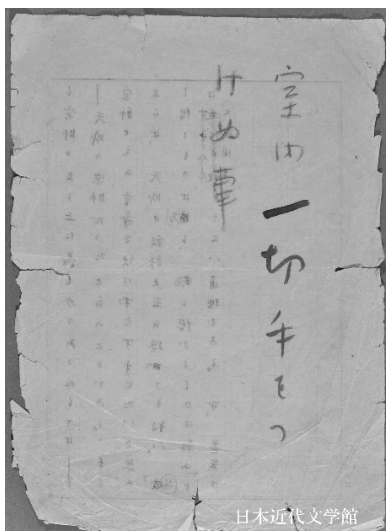
【図版】



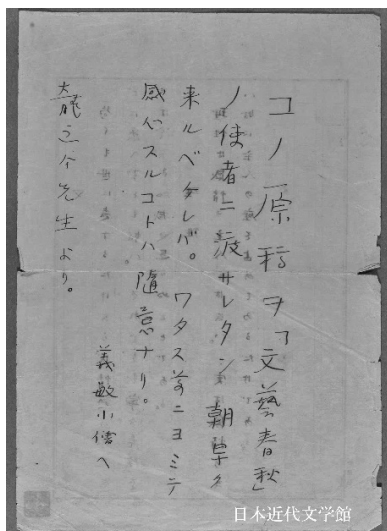
【図版一】『T0022137-2』原稿用紙裏



【図版二】『T0022137-2』原稿用紙表



【図版五】[T0022137-4] 原稿用紙裏



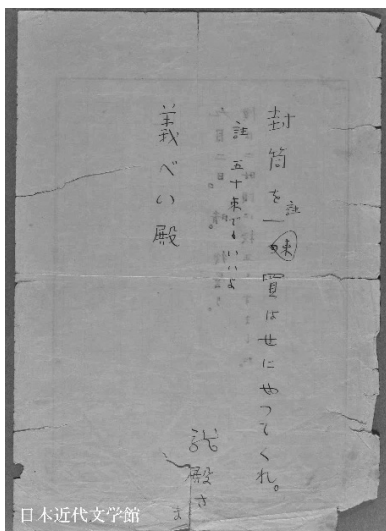
【図版三】[T0022137-3] 原稿用紙裏



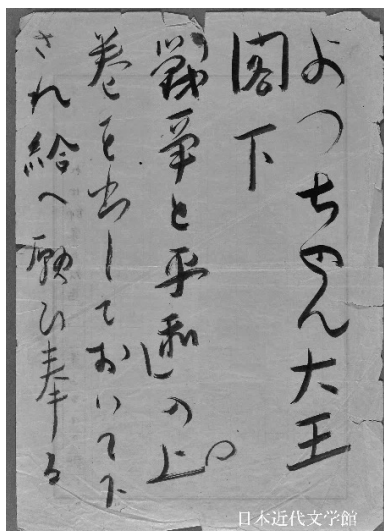
【図版六】[T0022137-4] 原稿用紙表



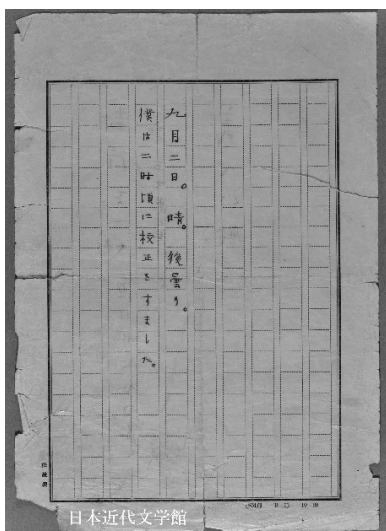
【図版四】[T0022137-3] 原稿用紙表



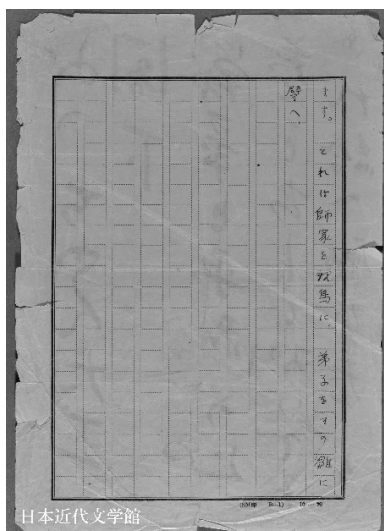
【図版九】〔T0022137-6〕原稿用紙裏



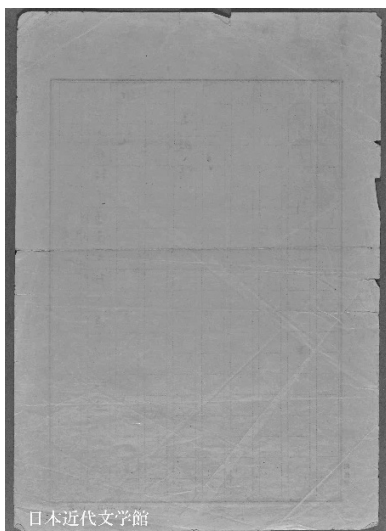
【図版七】〔T0022137-5〕原稿用紙裏



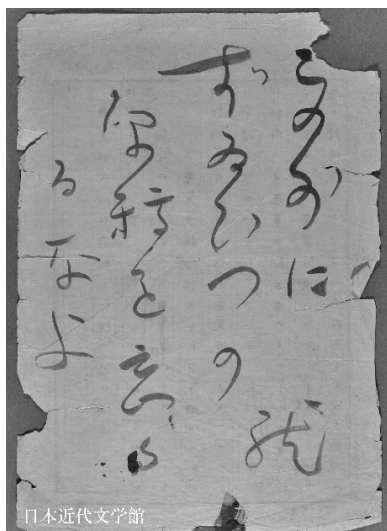
【図版一〇】〔T0022137-6〕原稿用紙表



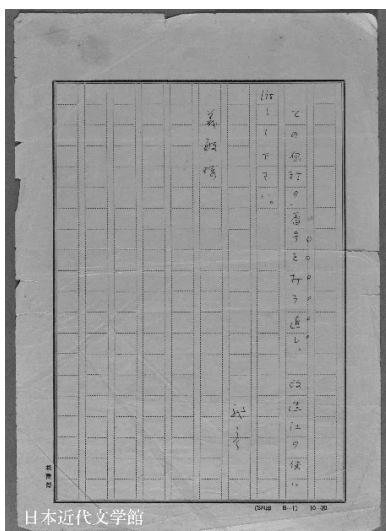
【図版八】〔T0022137-5〕原稿用紙表



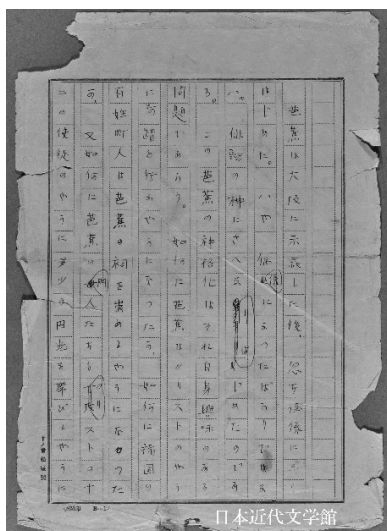
【図版一三】[T0022137-8]原稿用紙裏



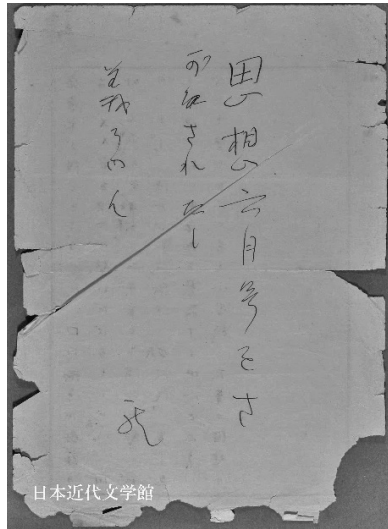
【図版一一】[T0022137-7]原稿用紙裏



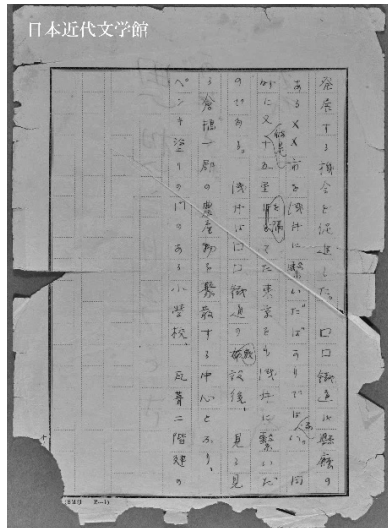
【図版一四】[T0022137-8]原稿用紙表



【図版一二】[T0022137-7]原稿用紙表



【図版一五】[T0022137-9]原稿用紙裏



【図版一六】[T0022137-9]原稿用紙表

【翻刻】

翻刻に際し、底本が旧字の場合は底本に従った。また、／は改行を示し、判読できない部分は□で示した。
なお、「」内は稿者による補足である。

○【図版五】[T0022137-4] 原稿用紙裏〔朱墨書〕

室内一切手をつ／けぬ事

○【図版六】[T0022137-4] 原稿用紙表〔十ノ廿 松屋製 (SM 印 B…1)〕。原稿用紙の左欄外、青鉛筆に

よる「大正／十四年／十月」の書き込みがある」

し宗師となる上に最も力のあつたものは——／天成の宗師だつたと云ふことである。もし／宗師と云ふ言葉を使はずにすませたいと思ふ／ならば、天成の教師と云ひ換ひても好い。「成／し得るものは成し、

為
十中八九

／為／

所し得ざるものは教ふ」と／は近代の教串のない眞理である。が、芭蕉は／

／大抵間違ひ／

○【図版七】[T0022137-5] 原稿用紙裏

よつちやん大王／閣下／「戦争と平和」の上／巻を出しておいて下／され給へ 願ひ奉る

○【図版八】[T0022137-5] 原稿用紙表〔(SM 印 B…1) 10……20〕

ます。これは師家を親鳥に、弟子をその雛に／譬へ、

○【図版九】[T0022137-6] 原稿用紙裏

註／束／

封筒を一つ買はせにやつてくれ。／註 五十束でもいいよ／龍殿さ／ま／義べい殿

○【図版一〇】[T0022137-6] 原稿用紙表〔松屋製 (SM 印 B…1) 10……20。書き出しは六行目から〕

九月二日。晴。後曇り。／僕は二時頃に校正をすました。

○【図版一二】[T0022137-7] 原稿用紙裏

この外に／ずゐひつの／原稿を忘る／るなよ／龍

○【図版一二】[T0022137-7] 原稿用紙表〔十ノ廿 松屋製 (SM 印 B…1)。書き出しは二行目から〕

／像／

芭蕉は大阪に示寂した後、忽ち偶像になり／はじめた。いや 偶像□になつたばかりではな／い。俳諧

／りは／

の神にさへな□□□□じめたのである／。この芭蕉の神格化はそれ自身興味のある／問題であらう。如

何に芭蕉はクリストのやう／に奇蹟を行ふやうになつたか、如何に諸国の／百姓町人は芭蕉の祠を崇め

／門／／クリ／

るやうにな□つた／か、又如何に芭蕉の廿人たちも十度ストの十／二の使徒のやうに多少の円光を帯びるやうに／

○【図版一三】[T0022137-8] 原稿用紙裏〔未記入〕

○【図版一四】[T0022137-8] 原稿用紙表〔松屋製 (SM 印 B…1) 10…20。書き出しは二行目から〕

この原稿の番号を打ち直し、改造社の使に／渡して下さい。／龍之介／義敏様

■「長江」断簡と「長江游記」をめぐって（章 璋）

○【図版一】「T0022137-2」原稿用紙裏〔朱墨書〕

ハリガミ一枚／リウ大人／ヨシ坊

【図版二】は芥川の葛巻への指示である。校正用と思われる朱墨を用いて、毛筆で書かれている。朱筆の署名「リウ大人」と宛先「ヨシ坊」には親しみが込められており、また、一点二画と丁寧に書かれた文字からは、【図版二】は作品の朱入れが一段落した後、落ち着いた状態で書かれたものだと推測できる。

当時、芥川がどの作品に朱を入れていたのかは定かではないが、【図版一】の裏面【図版二】に書かれた「長江」（『女性』、一九二四・九）の関連直筆資料の可能性もある。【図版二】の解題で後述するが、「長江」は【図版二】までの冒頭部分とそれ以降の本文部分とでは、異なる期間に執筆されたものと見ている。【図版一】を書くまでに芥川が朱を入れていたとすれば、おそらく先に執筆された、現在所在が確認されていない【図版二】以降の本文部分であろう。

また、【図版一】の中心となる芥川の指示は、書簡番号九一四として普及版『芥川龍之介全集』第一〇卷（岩波書店、一九三五・八。以下、普及版全集）に収録されている。おそらく普及版全集の編纂に携わっていた葛巻自身によって、この指示に一九二四年「（八月田端、家にて。葛巻義敏宛）」の日付・発信地・宛先、ならび

に「ハリガミ一枚」の注釈「〔ハリガミとは原稿用紙のつぎ貼りなり〕」が付けられている。

右を踏まえれば、【図版二】は一九二四年八月頃——後述するが、正確には七月と考える。葛巻が「八月」と記した理由は、おそらく「長江」が九月に発表されたことを踏まえていると思われる——、「長江」を仕上げて芥川が不要になったのであろう【図版二】を裏紙として用いて、葛巻に「原稿用紙のつぎ貼り」を指示したのではないか。「長江」の本文部分が、先に執筆された旧稿であれば、部分的に「つぎ貼り」して書き直すのも不思議はない。ただし、実物を確認できない以上、あくまでも推測に留めたい。

【図版二】からやや話題が逸れるが、「原稿用紙のつぎ貼り」に関しては、葛巻が「つぎ貼り」に関与したと思われる芥川の直筆資料は多数あり、その多くは現在山梨県立文学館に所蔵されている。一方で、一部の「切りあり」・「切取られた残片⁽²⁾」は藤沢市文書館の所蔵となっている。

山梨県立文学館所蔵資料の一部は現行版『芥川龍之介全集』第二―二三卷（岩波書店、一九九七・一一―一九九八・一二）に翻刻され、その際に「自筆原稿類には、著者本人による加筆・訂正・削除・切り貼りのほか、後年の第三者によると推定される整理の跡が見られるが、本全集では、明らかにこれに該当すると推定されるものについては、原則として本文に採用しなかった⁽³⁾」という方針に従っている。しかし、「後年の第三者によると推定される整理の跡」は比較的に区別しやすい一方、【図版二】のような芥川の指示の下で行われた「つぎ貼り」は、見分けることが難しいであろう。もっとも、この場合のような芥川の指示による「つぎ貼り」と、

芥川の没後、葛巻の意志による「つぎ貼り」とは、いずれも葛巻の手によるものであるため、慎重に見極める必要がある。

○【図版二】[T0022137-2] 原稿用紙表 [十ノ廿 松屋製 (SM印 B…1)]

／＼

の文章の愛讀者諸君は「堀川保吉」に對するや／＼に、この「長江」の一篇をもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

私は長江を溯つた時、絶えず日本を懷しが／＼つてゐた。しかし今は日本に、——炎暑の甚／＼しい東

／＼

燕

京に汪洋たる長江を懷しがつてゐる。長／＼江を？——いや、長江ばかりではない。廬／＼湖を、廬山を

／＼漢口

漢田の薔薇を、洞庭の波を懷／＼しがつてゐる。私の文章の愛讀者諸君は「堀川／保吉」に對するや／＼に、廬山／松

この私の懷慕迦げた私／＼にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

【図版二】は、一九二四年九月一日発行の『女性』第六卷第三号に掲載された「長江」の冒頭、二〇〇字詰

原稿用紙二枚中の二枚目にあたる部分の草稿と見られる。この一枚の前後、すなわち冒頭部分の一枚目と、「一蕪湖」・「二 溯江」・「三 廬山（上）」・「四 廬山（下）」の四回で構成される作品本文に関連する草稿・原稿等の所在は現在確認されていない。関連直筆資料が限られている中、本稿では初出『女性』に加え、のち「長江游記」として『支那游記』（改造社、一九二五・一〇）に収録されたテキストをも参照しつつ、【図版二】の位置付け、ひいては【図版二】から推測しうる「長江」の創作背景を明らかにしたい。まずは【図版二】の特徴を〈推敲の痕跡〉・〈振り仮名〉・〈原稿用紙の欄外〉の、三つの角度から概観してゆく。

〈推敲の痕跡〉

原稿用紙の一行目に、最初のマス目から「の文章の愛讀者諸君」と書き始められた【図版二】は、七行目から一〇行目にかけて推敲の痕跡が集中している。七行目の行末に書きかけた廬山の「廬」が蕪湖の「蕪」に直され、八行目の行頭に「湖」が書かれていることから、この修正は書き進めながら行われたものだと推察できる。

続いて、八行目の四マス目から一三マス目にかけて書き込まれ、七行目との行間寄りに振り仮名まで付けられた「廬山を 漢口の薔薇を」は、「廬山」・「漢口」・「薔薇」の代わりに、九行目との行間に「漢口」・「廬山」・「松」と書き、「漢口を 廬山の松を」に改めている。修正前の「漢口の薔薇」は、後続文「洞庭の波」と同じ

構文であるため、書き進めながら「廬山ろざんの松まつ」に直したのか、それとも「洞庭どうていの波なみ」の先まで筆を進め、後から修正されたのかは定かではない。

ただし、右に取り上げた二つの修正が、いずれも廬山と関係していることは看過できない。すなわち【図版二】の八行目まで書き進めた芥川は、ここで文中における廬山の配置、ひいては廬山の見せ方——「廬山ろざん」の全体像を読者に想起させるのか、それとも「廬山ろざんの松まつ」に焦点をあてるのか——について熟考したことが窺える。はたして芥川は、「長江」の冒頭二枚の執筆に際し、すでに本文後半の「三 廬山（上）」・「四 廬山（下）」まで構想を終え、本文を引き立てるために冒頭の修正を施したのであるか。その一端を示す手掛かりが（原稿用紙の欄外）に残されているので後ほど確認するとして、まずは推敲の前後における、廬山の配置の変化について触れておきたい。

芥川は上海から長江を遡る汽船に乗り、沿岸都市の蕪湖と九江（廬山最寄りの河港。以下、〔 〕内は稿者による補足あるいは省略を示す）で途中下船し、それぞれ短い滞在を経て航路で漢口に向かった。続いて漢口から足を伸ばして長沙を往復し、その際に洞庭湖にも立ち寄っていた。この経路を念頭に置きつつ、改めて【図版二】の七・八行目に目を向けると、七行目の最後に書きかけた「廬」はともかく、「蕪湖ウフコを」以下、抹消された「廬山ろざんを 漢口ハンカウの薔薇ばらを」までの部分は実際の経路と重なり、さらにその先に「洞庭どうていの波なみ」が待ち受けていることになる。

しかし、芥川が施した修正では、あえて廬山と漢口に言及する順番を入れ替えている。この措置によって、長江一帯に土地勘がある読者も、おそらく当該箇所を経路として認識できず、一種の整序された文学的表現——「蕪湖」や「漢口」のような町全体の雰囲気から、「廬山の松」や「洞庭の波」のような具体的な景物まで、すべてが「私」の「懐しがつてゐる」対象であること——として捉えるのであろう。

では、芥川は作品の文学性を高めるために、かかる修正を施したのかというと、必ずしもそうとは限らない。あえていうならば、これら修正の出発点は、むしろ土地勘がある読者、とりわけ「一 蕪湖」に登場し、芥川を蕪湖に招待した東京府立第三中学校時代の同級生西村貞吉のような関係者を念頭に、長江を遡る経路を作品構成の見取り図として捉えられないように施した一策ではないかと考える。その理由は、やはり〈原稿用紙の欄外〉を確認してからに譲る。

話題を〈推敲の痕跡〉に戻すと、上記のほか、原稿用紙の一〇行目にも繰り返し修正された箇所がある。マス目に書かれた「この」に続き、最初は「私の懐」と書いた部分を抹消し、後続のマス目で「莫迦げた私」に直している。加えて削除された「の懐」の横、九行目との行間には「当時」と差し替えようとした痕跡もあり、さらに「当時」も「莫迦げ」も取り消し線によって消している。しかし、「莫迦げ」に続く「た私」、および行間に書かれた「莫迦」の振り仮名「ばか」は消されておらず、どうやら「莫迦げた私」の削除は途中で思い止まっているようにも見える。一方で、初出『女性』以降、当該箇所は「私の追憶癖」(『支那遊記』では「追憶癖」

となっており、推敲を重ねた「莫迦^{ばか}げた私^{わたし}」よりも、初めに書かれた「私の懐^{わかし}」——【図版二】において三回も繰り返されている「懐^{わかし}がつてゐた／懐^{わかし}がつてゐる」を綴りたかったのであるうか——に近い表現が用いられている。

主観的な、どちらかといえばポジティブな「私の懐^{わかし}」へしがつてゐた／しがつてゐる」から、ネガティブな「莫迦^{ばか}げた私^{わたし}」に改めようとした理由の一つは、直前の九行目と一行目で繰り返される「私の文章の愛讀者諸君」を意識するあまりの、自身の文章に対する半ば客観的な自己批判によるものだと考えられる。【図版二】は、まさに執筆時の、芥川のこうした心の機微を捉えた記録だといえよう。やがてこの箇所から滲み出た感情の波が、初出誌において、中立的な「私の追憶癖^{つひおくへき}」へと収斂されていく。

〈振り仮名〉

【図版二】には複数の〈推敲の痕跡〉があり、且つ初出における「私の追憶癖^{つひおくへき}」と異なる表現も確認できるので、この一枚は完成原稿ではなく、その前段階にあたる草稿と見てよからう。一方で草稿とはいえ、総ルビではないものの、「目^め」や「私^{わたし}」のような常用漢字まで振り仮名が付けられている点から、下書きとも一線を画している。

【図版二】における振り仮名の特徴を確認していくと、例えば八行目で抹消された「廬山^{ろざん}を 漢口^{ハンカオ}の薔薇^{ばら}を」

のように、抹消された部分まで振り仮名が付いている。通常、原稿用紙を最後まで埋めてから振り仮名を付ける場合、抹消した部分は付ける必要がない。裏を返せば、【図版二】は書き進めながら振り仮名を付けていたことになる。加えて、下書きのつもりで書いた草稿であれば、【図版三】から【図版一六】までのように、常用漢字はおろか、振り仮名自体を付けないであろう。

要するに、結果的に草稿になってしまった【図版二】は、当初は完成原稿として執筆しつつも、おそらく〈推敲の痕跡〉で述べた原稿用紙一〇行目の修正が意に満たなかったため、反故にしたのではないかと推測できる。実際に【図版二】を初出『女性』所収テキストと照合してみても、『女性』が総ルビであることを除けば、両者の相違が「私の追憶癖」に関する一箇所に限られることも、右の推測の傍証となりうる。完成原稿が所在不明となった今、ブレ完成原稿とも称しうる【図版二】は、「長江」ないし「長江游記」の創作背景を探るうえで、欠かせない存在といえよう。

〈原稿用紙の欄外〉

〈振り仮名〉に加え、【図版二】にはもう一つの特徴がある。一〇行×二〇マスからなる二〇〇字詰原稿用紙の左側、欄外余白に一一行目が書かれていることである。記号を含めて二三文字を有する一一行目は、新しい原稿用紙に書く場合は二行にわたることになる。しかし、芥川はあえて原稿用紙を替えず、余白下部の印字「十

ノ廿 松屋製」にも注意しつつ、文字の間隔を詰めながら一行で書いている。では、芥川はなぜ原稿用紙を替えなかったのか。その理由について考えてみたい。

主な理由は二つあると推察される。

第一に、【図版二】の二行目を書く前から、芥川はすでに「長江」の冒頭部分において、残りの文章がおよそ一行に収められることを予見できたからである。実際に、九行目から一行目にかけて書かれた「私の文章の愛読者諸君は「堀川保吉」^{ほりはやすきち}に対するやうに、この「」にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？」は、一行目から三行目にかけて書かれた前段落の末尾の反復であり、前段落中の「長江」の一篇」^{わたし}と対応する箇所——初出における「私の追憶癖」^{わたし つひおくへき}——以外は同文である。【図版二】の段階で、まだ「私の追憶癖」にたどり着いていないとはいえ、少なくとも九行目まで書き進めた時点では、すでに冒頭部分の終結は決めていたと見える。一度書いた文章の繰り返しであれば字数も把握でき、新しい原稿用紙に替えるほどではないと考え、【図版二】の欄外余白に残りの文章を詰めたのであろう。

第二に、【図版二】までの冒頭部分以降の文章、つまり「一 蕪湖」から「四 廬山（下）」までの「長江」の本文は先に書かれた旧稿であり、『女性』への発表に合わせて、新たに【図版二】を含めた冒頭部分を付け加えた可能性がある。既存の旧稿に一行余りを書き足すことよりも、書き下ろしの【図版二】の方が体裁を整えやすいので、現在の形になったのではないかと考える。

右に述べた仮説は、【図版二】以外の関連直筆資料が現存しないため、確証は得られない。ただし芥川の書簡の中に、裏付けとなる言及は確認できる。一九二一年三月一九日から七月中旬にかけて行われた中国旅行の翌年、一九二二年三月一九日付西村貞吉に宛てた書簡において、芥川は「今日から長江游記を書き出した第一回は西村貞吉と云ふ題だからそのつもりでゐる東京は春暖梅白去つて桃紅来つてゐる又支那へ行きたくなくなつた金が⁽⁵⁾ない」と記している。

この西村は〈推敲の痕跡〉で述べたように、芥川の中学時代の同級生であり、彼を長江の沿岸都市蕪湖に招いた人物である。西村と別れて帰国した芥川がその一年後、殊更に中国にいる西村に、「今日から長江游記を書き出した第一回は西村貞吉と云ふ題だ」と伝えていることは、実際にこの頃、西村が登場する「長江游記」「第一回」の執筆に取り掛かっていると見るべきであろう。一方で、一九二四年九月発行の『女性』に掲載された「長江」というと、書簡で言及された標題「長江游記」と回のタイトル「第一回」「西村貞吉」とやや異なるものの、【図版二】に書かれた冒頭部分の直後に、やはり西村のこと——「私は西村貞吉と一しよに蕪湖の往来を歩いてゐた」⁽⁶⁾——から書き出された「一 蕪湖」が続いている。そして一九二五年一〇月刊行の『支那游記』には、『女性』掲載時の標題「長江」が「長江游記」に改められ、【図版二】を含めた冒頭部分に小見出し「前置き」が付けられたといった変更点はあるが、本文が西村のことを書いた「一 蕪湖」から始まっていることに変更はない。要するに、「長江」ないし「長江游記」の本文「一 蕪湖」の内容から見ても、西村宛書

簡と大きな矛盾はなく、一九二二年三月一九日頃にすでに執筆されていたと考えるべきであろう。

そして西村宛書簡のほか、同時期に大阪毎日新聞社〔以下、大毎〕の学芸部長薄田泣菫に宛てた書簡においても「長江游記」に言及している。以下、薄田宛書簡四通の当該箇所を引用し、時系列に沿って確認してゆく。

【書簡一】一九二二年二月一〇日〔傍線は稿者による、以下同じ〕

啓菊池の病氣や何かの為江南游記掉尾の原稿遲滞を來たし御氣の毒に存じますさて同游記も廿九回を以て一段落つきましたが今度は長江游記へとりかかる前に一週間程息つきをしますといふよりさせて下さい一日四五枚書きつづけるのは中々楽ぢやありませんしかし読者退屈とあらば何時までも延期して下さい当方の考へでは長江游記、湖北游記、河南游記、北京游記、大同游記とさきが遼遠故これからはあまり油を売らず一游記五回乃至十回で進行したいと思つてゐます 以上

【書簡二】一九二二年二月一八日

冠省度々御手紙いただき申訣無之候サンデイの小説は必書くべく候間御休神下され度候支那紀行も廬山まで書き居り、これも書き続けたく存候へども何分にも健康すぐれず、少し暖かにでも相成り候はゞ書き続けむと存居候この頃雑誌にも小説を書かず旧稿に手を入れたる位にてお茶を濁し居る始末、〔…〕

【書簡三】一九二二年二月〔年月推定〕〔転載〕⁸⁾

〔…〕

去年の春見し長江の旅日記けふ書きしかばやがて送らむ

旅日記とくかけと云ふ君の文見のつらければ二日見ずけり

神經衰弱癒えずぬば玉の夢のみ見つつ安いせずわれは

二伸

マガジン・セクションへはその中に何か書きます。何しろ方々の催促にやり切れぬ故、けふ鶴沼に踏晦し、

二三日静養した上、紀行及びマガジン・セクションへ取りかかります。

【書簡四】一九二二年五月二八日

拝啓長崎へ参るの途大阪の社へよるべき所長江游記の稿未成らず恐縮の余り近づきがたし長崎滞在中作る所の小品一篇、マガジン・セクションの原稿にさし上げ候間御落手下され度、追つて帰京後はきつと長江游記にとりかかり申すべく候 以上^④

一九二二年一月一日から二月一三日〔休載を含む〕まで、芥川は「大阪毎日新聞」紙上で二九回にわたって「江南游記」を連載した。【書簡二】によれば、「江南游記」最終回の原稿を送稿したのちの二月一〇日頃、芥川は薄田に「長江游記」の連載を予定していること、ならびに以降は「一游記五回乃至十回」のペースで進み

たいことなど、具体的な執筆計画を報告したうえで、「一週間程息つき」を求めている。それから約一週間が経った二月一八日に、【書簡二】によれば、「支那紀行」は「廬山まで」書き進められているが、その先は健康上の問題を理由に、寒気が落ち着くまで執筆を延ばしている。そして二月二二日付の【書簡三】において、【書簡二】で言及された「支那紀行」が「長江の旅日記」、つまり【書簡一】の「長江游記」であること、ならびに芥川がその完成をさらに先延ばしていることが確認できる。最後に【書簡四】では、【書簡三】から三か月が経過した五月二八日になっても、先に引用した三月一九日付西村宛書簡に示されていたような進展はあるが、「長江游記の稿未成らず」の窮地からは脱却できていないことが窺える。

ここで注目したいのは、芥川がいか「長江游記」の執筆から目を背けてきたかということではなく、むしろ一九二二年の「江南游記」完結後、一週間空くか否や、すぐ「長江游記」の執筆に取り掛かったことである。「長江游記」は最終的に「大阪毎日新聞」紙上に掲載されなかったとはいえ、【書簡一】から【書簡四】までの約三か月の間に取り組んできた作品が、原稿の一枚も仕上げられなかったことは考えにくい。また、芥川に關しては【書簡二】に「この頃雑誌にも小説を書かず旧稿に手を入れたる位にてお茶を濁し居る始末」とあるように、旧稿に手を加えて発表することは珍しくない^⑪。いずれ発表することを見越して、一九二二年に執筆した「長江游記」も芥川の手元に置いていたと考えたい。それが西村宛書簡と関係する「長江」の「一 蕪湖」や、薄田宛【書簡二】に言及するところの「廬山」と関係する「長江」の「三 廬山（上）」・「四 廬山（下）」で

あれば、一九二四年に『女性』で発表された「長江」は、本文のベースとなる原稿の大半が二年前にできていたことになる。それは、「長江」の発表からさらに一年経った一九二五年、「長江游記」として『支那游記』に収録された際に、同書の巻頭を飾った「自序」における「それから日本へ帰つた後、『上海游記』や『江南游記』を一日に一回づつ執筆した。『長江游記』も『江南游記』の後にやはり一日に一回づつ執筆しかけた未成品である⁽¹²⁾」とも一致している。

一方で、【図版二】を含めた冒頭部分の二枚は、一枚目が現存しないため『女性』から引用すると、書き出しに「これは三年前支那に遊び、長江を溯つた時の紀行である⁽¹³⁾」とあるように、一九二一年の中国旅行から数えて三年後の一九二四年に執筆されたものである。書き出しのほかに、【図版二】で二回にわたって繰り返された「堀川保吉」——「私の文章の愛讀者諸君は「堀川保吉」に対するやうに」と書かれているので、「堀川保吉」は新しい登場人物ではなく、「私の文章の愛讀者諸君」ならば知っているのであろう、コンテキストとしての「堀川保吉」と捉えられる——や「炎暑の甚しい東京」からも執筆期間を推定できる。

まずは「堀川保吉」から見ていくと、芥川には「堀川保吉」を視点人物とする、〈保吉もの〉と呼ばれる一連の作品群がある。その定義は次のようにまとめられている。

「…」その最初の作品は、「魚河岸」(『婦人公論』一九二二・八)であるが、この作品は、初出時には「わ

たし」の体験として書かれていたものを、『黄雀風』（一九二四・七）に収める時に、「保吉」に変えたものであった。それは、同じ作品集に収められた「保吉の手帳から」（初出『改造』一九二三・五ただし初出時の題は「保吉の手帳」）、「少年」「お時儀」「文章」「寒さ」「あばばば」「或恋愛小説」が、すべて保吉という視点人物によって描かれていることに合わせたものであろうし、『夜来の花』縮刷本（一九二四・五）の巻末広告には、「堀川保吉 創作集（近刊）」とあることなどから、堀川保吉の眼に映じた人生風景として、それらをまとめる意図があったことを窺わせる。しかも初出「保吉の手帳」には前文があつて、保吉が東京の人で、二五歳から二七歳まで海軍の学校に奉職していたことと、その間の見聞を収録したノート（¹⁴）がこの小品であることを言っている。つまり保吉とは、五年ほど前の芥川自身でもあった。

右の引用において、とりわけ〈保吉もの〉に関連する作品・作品集の刊行日に注目したい。〈保吉もの〉の嚆矢となる「魚河岸」は一九二二年八月発行の『婦人公論』第七年第九号に掲載された作品であるが、発表当初には「保吉」は登場しておらず、一九二四年七月に刊行された芥川の第七短編集『黄雀風』（新潮社）に収録された際に、「わたし」から「保吉」に改められたものである。一九二二年とは「江南游記」が「大阪毎日新聞」に連載された年であり、また、二月から五月にかけて、芥川が複数回にわたって西村や薄田と「長江游記」について文通した年でもある。その年の八月に発表された「魚河岸」に、「保吉」が登場していないとい

うことは、この時点で「魚河岸」は「堀川保吉」^{ほりかはやすきち}が登場する【図版二】のコンテキストになりえない。続いて「魚河岸」の次に発表され、「保吉」も登場している作品は一九二三年五月発行の『改造』第五巻第五号に掲載された「保吉の手帳」である。コンテキストが存在することを前提とすれば、【図版二】の執筆期間の上限は「保吉の手帳」が発表された一九二三年五月以降になる。

しかし、「保吉の手帳」の一篇のみで、登場人物の「保吉」を【図版二】に書かれた「私の文章の愛讀者諸君」^{わたくし}が共有しうるコンテキストに押し上げられるかという点、おそらく十分といえない。となると、注目すべきなのはやはり収録作品全一六篇中、「保吉もの」^{ほりかはやすきち}が後半の八篇を連ねる『黄雀風』である。一九二四年七月に刊行された『黄雀風』は、同年九月に発行された「長江」の初出誌『女性』より、刊行日が二か月ほど先行している。「私の文章の愛讀者諸君」^{わたくし}であれば、この二か月の間に『黄雀風』を手に入れて「保吉もの」^{ほりかはやすきち}を通して、視点人物の「保吉」に馴染んだということになる。そして記憶も新しいうちに『女性』誌上で「堀川保吉」^{ほりかはやすきち}と再会し、「長江」を「保吉もの」の延長線上にある作品として享受できる。また、「私の文章の愛讀者」^{わたくし}と自任しながらも「堀川保吉」^{ほりかはやすきち}に馴染みの少ない読者は、「長江」を契機に、まだ書店の店頭に並んでいるのであろう『黄雀風』を手に入れる。つまり自著の宣伝をも兼ねられることが、【図版二】のように「堀川保吉」^{ほりかはやすきち}の名を「長江」の冒頭部分に記し、旧稿「長江游記」に付け加えたメリットとして挙げられよう。『黄雀風』の刊行日が一九二四年七月一八日⁽⁵⁾であるのに対し、「長江」を掲載した『女性』当該号の印刷納本日が同年八月

七日⁽¹⁶⁾——印刷納本日が正しければ、この日までに「長江」は脱稿されていたことになる——であり、両者が僅か三週間しか前後していないことから、互いの関係性が窺える。

続いて、「炎暑^{えんしよ}の甚しい東京」について確認する。【図版二】を含めた「長江」の冒頭部分に書かれた「炎暑^{えんしよ}の甚しい東京」は、掲載誌『女性』の「編輯後記」に記されている「※恐ろしい暑さだ。人を氣違ひにするやうな暑さだ。〔…〕不安と焦燥と恐怖との夏だ⁽¹⁷⁾」の一節と一致しており、前述した当該の印刷納本日と併せて見れば、いずれも一九二四年八月七日以前の猛暑を指していることが推察できる。それでは一九二四年の東京はいかに暑かったのか。「東京朝日新聞」からいくつかの記事を引用する。

【六月二十四日（夕刊二面）】「今年一番の暑さ 午前七時七十度七分 続く蒸暑さ」

〔…〕二十三日朝六時東京の気温は華氏の七十度七分〔摂氏二一・五度〕といふ真夏にも適しい暑さを示し、同時刻に於ける気温としては今年初めての暑さだった、〔…〕

【七月八日（朝刊七面）】「けふは驟雨が来るか 昨日の暑さ九十度を突破した 気象台観測」

〔…〕七日の最高温度は九十度〔約摂氏三三・二度〕を突破した、市民は全く茹られたやうに、これから先の暑さをどうかと心配してゐる、気象台の話に依ると

『六日以来気圧の配置が悉皆真夏の状態になつたので暑さが急に酷どくなり今後暫くこの天候は続くか

も知れない、七日などは平年より四度〔約撰氏二・二度〕以上も暑く一般に昨年比して高温のやうだ、〔…〕
【七月九日（朝刊二一面）】「暑さに襲はるゝ大東京 然しこの暑さが続けば豊年」

暑い、——まだ七月の初めだといふのに、早くも酷暑は東京に來た、八日中央氣象台で計つた温度が八十五度三分〔約撰氏二九・六度〕藤原博士も『今年は平年より暑さが非常に早かつた、〔…〕去年の八月は近年にない暑さだつたが、今年もその二の舞を演じさうだ』と云つて居る

【七月二六日（朝刊七面）】「ゆふべの暑さ 夜中で八十八度 午後十一時に調べた 各警察署の寒暖計」

〔…〕きのふの暑さはまた格別で風のない東京はまるでむし殺される様な感があり、夜に入つても坐つてゐてさへチリ／＼と汗が滲み出た、昨夜十一時を期して市内外各警察に就いて調べた所は大体次の通りでバラツク街などいつものことながら夜通しまんちりともされぬ人々が多かつた

浅草（象潟） 八五〔約撰氏二九・四度〕

千住署 八七〔約撰氏三〇・六度〕

〔…〕

小石川変電所（東電） 八八〔約撰氏三一・一度〕

東京駅 八三〔約撰氏二八・三度〕

右の引用から分かるように、一九二四年の東京は六月下旬から「真夏にも適しい暑さを示し」、七月七日に最高気温が約摂氏三三・二度を突破してから、下旬にかけて二九・二度から三三・六度の間で推移している。芥川もこの暑さに耐えられなかったと見え、七月一八日刊行の『黄雀風』を見届けてからか、同月二一日付（年次推定）石川寅吉宛書簡において、「二十日夜半と云ふよりも二十一日朝に近」い時間帯に「蚊帳の中にて裸になりて」仕事を終え、「二十二日軽井沢の鶴屋と申す宿屋へ参り候」⁽²⁰⁾と、【図版二】にいう「炎暑の甚しい東京」から、軽井沢へ避暑することを明かしている。そして帰京したのは、八月二六日付室生犀星宛書簡によれば、夏の終わりが近づいた八月「二十三日」⁽²¹⁾である。

以上に述べたことをまとめると、【図版二】ないし「長江」の冒頭部分に記された「炎暑の甚しい東京」は、「長江」が発表された一九二四年の夏頃の新聞記事・気象データ、および芥川の書簡から読み取れる情報と一致している。また、「長江」を掲載した『女性』当該号の「編輯後記」にも、「暑さ」について同じ趣旨のことが述べられているので、【図版二】を含めた「長江」冒頭部分の二枚は、間違いなく一九二四年の夏に執筆されたものだと言言できる。

ところで、【図版一】の解題で言及したように、【図版二】の裏面である【図版一】が普及版全集に収録された際に、葛巻は「八月田端、家にて」と推定していた。とはいえ、「八月」かどうかという点はまだ検討の余地がある。以下、既出情報を中心に改めて確認したい。

繰り返しになるが、「長江」を掲載した『女性』第六卷第三号の印刷納本日は八月七日である。一方で、芥川は七月二日から八月二三日までの間に東京の自宅を留守にしており、その間は「田端、家にて」【図版二】の裏面を用いて葛巻に指示を出すことができない。つまり、自宅で指示でき、かつ『女性』の印刷納本日以前である期間は、七月二日が下限となる。

他方、上限はというと、前掲「東京朝日新聞」【六月二四日（夕刊二面）】の記事にも示されているように、一九二四年六月下旬から、東京はすでに「真夏にも適しい暑さ」になり、客観的に見れば【図版二】に書かれている「炎暑えんしよの甚しい東京」の範疇に入っている。しかし、芥川は六月三〇日付南幸夫宛書簡において、「五月雨の為、東京はまだ甚しく暑くはありません」と記している⁽²⁾ので、芥川が「炎暑えんしよの甚しい東京」と感じたのは七月以降と推定できる。そして前述したように、【図版二】で「堀川保吉」^{ほりかはやすきち}に言及したことは、『黄雀風』の刊行日である七月一八日を意識していよう。その前後に「長江」の冒頭部分を仕上げた芥川は、旧稿「長江游記」に朱を入れて「長江」の本文部分に仕立て直した後、そのまま朱筆で反故にした【図版二】の裏面に、葛巻に「つぎ貼り」を指示する【図版一】を書いたとは考えられないか。

仮に右のようであれば、本稿〈推敲の痕跡〉で未解決だった疑問——【図版二】は「長江」の冒頭部分であるにもかかわらず、本文の後半に書かれる廬山を中心に、修正が施されているのはなぜか——は次のように考える。

一九二四年七月頃、『女性』に原稿を依頼された芥川は、二年前に書きかけた旧稿「長江游記」を読み返したうえ、七月当時の状況に合わせて冒頭部分を書き下ろし、「長江」として発表しようとした。しかし、前掲薄田宛【書簡二】に示されているように、旧稿「長江游記」は「廬山まで」しか書かれておらず、【書簡一】で明かされている当初の執筆計画「一游記五回乃至十回」に達していない。事実上「四 廬山（下）」で頓挫した「長江游記」改め「長江」本文部分の、その印象を和らげるために、芥川は新たに執筆する「長江」冒頭部分の【図版二】において、とりわけ廬山に関する表現に気を配った。原稿用紙七行目の末尾に書きかけた「廬」を含め、八行目の「廬山を 漢口の薔薇を」を「漢口を 廬山の松を」に直したことがその表れである。

現存しない旧稿「長江游記」にあたることはできないが、『女性』に掲載された「長江」によれば、最終回「四 廬山（下）」において、「大元洋行の主人」が語る「香炉峰と云ふのも二つありますがね。こつちのは李白の香炉峰、あつちのは白楽天の香炉峰——このハクラクの香炉峰つてやつは松一本ない禿げ山がす。……………」

というエピソードが書かれている。このエピソードと呼応するように、最終段落にも「しかしやつと辿り着いて見ると、山風に鳴つてゐる松の間、岩山を繞らせた目の下の谷に、赤い屋根だの黒い屋根だの、無数の屋根の並んでゐるのは思つたよりも快い眺めである。〔…〕ハクラクの香炉峰は姑く問はず、兎に角避暑地たるクウリンは一夏を消するのに足る処らしい」として、ふたたび「松」の話が持ち出されている。【図版二】における「廬山を」から「廬山の松を」への修正は、作品の掉尾を飾るこの「松」の話を引き立てるための修正で

あろう。

また、「廬山ろざんを 漢口ハンカオの薔薇ばらを」を「漢口ハンカオを 廬山ろざんの松まつを」に改めることは、芥川の実際の経路から外れることも〈推敲の痕跡〉で述べた通りである。芥川があえてこのように修正した理由は、やはり旧稿「長江游記」が廬山で頓挫したことを意識し、土地勘がある読者ならば廬山の先を期待してしまうかもしれないと、あえて作品構成の見取り図にもなりうる実際の経路に手を加えたということにもなろう。

■「侏儒の言葉」草稿（小谷 瑛輔）

ここでは【図版三・四】[T0022137-3]に示した資料について詳しく見る。

本資料には、原稿用紙の裏に、芥川の字で以下のように葛巻義敏宛の指示が書かれている。

コノ原稿ヲ「文藝春秋」ノ使者ニ渡サレタシ 朝早く来ルベケレバ。ワタス前ニヨミテ感心スルコトハ随
意ナリ。

義敏小僧へ

龍之介先生より。

『文藝春秋』に寄稿する何らかの原稿に添えた一枚ということであろう。「龍之介先生」と名乗り、内容を読むことを葛巻に促していることから、お遣いをさせながら葛巻に文学的な教育を与えようと芥川が試みていた様子うかがえる。

このメモは、「侏儒の言葉」の草稿と見られるものの裏に書かれている。

又

苟くも世に処するだけならば情熱の不足などは患へずとも好い。それよりも寧ろ危険なのは冷淡さ加減の足りぬことである。

理性

理性は感情の主人ではない。実は感情のない時に主人の座を占めてゐるだけである。

前半の「情熱」と「冷淡」さ、後半の「感情」と「理性」というのは、重なり合う二項対立について述べた内容と言える。『文藝春秋』創刊号（一九二三・一）の「侏儒の言葉」連載第一回の「一星」で、輝く星がいつか冷灰のように光を失ってしまうことが語られ、生物の生死がそれになぞらえられる。それに続き、二回目の連載二月号掲載分「二鼻」では、「あらゆる熱情は理性の存在を忘れ易い」という文言がある。この通り、

「熱情」と「理性」のような、エネルギーのある状態と冷めた／覺めた状態との二項対立は、「侏儒の言葉」の冒頭からの主要なテーマであった。連載第二回の「二 鼻」の右の引用部は、熱情があるときには理性が失われがちだということを述べるものであり、その点で、草稿にある「理性」の内容と重なる内容である。

なお、草稿前半の「又」の箇所については、酷似した内容が『文藝春秋』一九二五年八月号に掲載されており、その内容は、関連する箇所も含めて引用すれば次の通りである。

女の顔

女は情熱に駆られると、不思議にも少女らしい顔をするものである。尤もその情熱なるものはパラソルに対する情熱でも好い。

世間智

消火は放火ほど容易ではない。かう言ふ世間智の代表的所有者は確かに「ベル・アミ」の主人公であらう。彼は恋人をつくる時にもちやんともう絶縁することを考へてゐる。

又

単に世間に処するだけならば、情熱の不足などは患へずとも好い。それよりも寧ろ危険なのは明らかに冷淡さの不足である。

草稿では、「又」以前がどのような内容であったのが確認できないため、実際に『文藝春秋』に掲載されたように「世間智」に続く内容として書かれたのかどうかは不明である。

一九二三年一月から一九二五年一月までと長期間にわたって連載された「侏儒の言葉」の中で、「理性」の価値には変化が見られる。最初の方は、「理性」は見失われがちな希少なものとして価値が高く見積もられており、「侏儒の言葉」という作品自体、芥川が理性の体现者であることを誇示するかのような調子で書かれている。後半期でも、本作が理性の体现者のような立場から書かれている調子自体には変わりはないものの、そうした理性的な立場に対する自嘲的な内容が目立ってくる。最も象徴的なのは、『文藝春秋』一九二七年一〇月に掲載された遺稿としての「侏儒の言葉」の「理性のわたしに教へたものは畢竟理性の無力だった」であろう。

右に引用した『文藝春秋』一九二五年八月号掲載分でも、理性や冷淡さが必要となるのは「世間に処するだけならば」という限定が付されている。逆に言えば、その限定を外せば、一般的には本質的に重要なのは理性よりも情熱だということになるだろうか。こうした点から見れば、同様の内容が書かれている本草稿は、理性の限界を芥川が考えつつある一九二五年頃と考えるのが妥当であろう。また、一九二五年八月掲載分の決定稿成立以前と推定されることと、原稿用紙が一九二五年の途中から晩年まで用いられたタイプのものであることを考え合わせると、ある程度時期は絞られることになる。

草稿後半の「理性」は、最終的に「侏儒の言葉」には掲載されなかった。情熱的、感情的になりたくとも、どうしてもそれ以上に理性的であってしまふことへの自嘲を語る、というこの時期の芥川の問題意識には、合わない一節だと判断されたためだろうか。

■未定稿「美しい村」断簡の翻刻と『思想』六月号をめぐって（小澤 純）

本資料「T0022137-9」は、原稿用紙の裏面に芥川によるペン書きで、以下のように記してある。

思想六月号をさが□□されたし

義ちゃん

龍

芥川が葛巻に岩波書店発行の月刊誌『思想』六月号を探すように依頼しているものである。普及版全集で増補された書簡篇（一九三五・八）からは、葉書や封書のみならず、こうしたメモによって、様々な用事を芥川が葛巻にしていたことが具体的にわかる。ただ、こうした芥川家内でのやりとりは、葛巻も深く関わった普及

版全集に複数収録されているものの、本メモは採られていない。書簡として扱うには余りに事務的だと判断されたのか、それとも指示のあった正確な時期を葛巻が失念してしまったのかは判然としないが、『思想』のどの六月号を指していた可能性があるのかについては、原稿用紙の表面の内容を確認した上で考察してみたい。

表面は、松屋製青色罫二〇〇字詰原稿用紙に、ペン書きで右端の一行目から書き始められたものの中断され、四行分の余白がある。なお、文字を挿入している場合には「」を用い、原稿用紙の行ごとに「」を入れた。

発展する機会を促進した。□□鉄道は県庁の／ある××市を浅井に繋いだばかりでは「ない。同／時に

又「彼は」十五里ほど「を隔」てた東京をも浅井に繋いだ／のである。浅井は□□鉄道の布「敷」設後、見る見／る倉橋二郡の農産物を集散する中心となり、／ペンキ塗りの門のある小学校、瓦葺二階建の／

本資料は、『文庫目録増補版』一三頁にも「『美しい村』断簡」計四枚のうちの「美しい村」「未定稿Ⅰに類似した断簡」として二重に記載されたように、新版『芥川龍之介全集 第二十二巻』（岩波書店、一九九七・一〇）に収録されている未定稿「美しい村」の未定稿Ⅰの一部に類似するが、山梨県立文学館編『芥川龍之介資料集』（山梨県立文学館、一九九三・一一、以下、『資料集』）には、未定稿Ⅰの原稿用紙八枚と、未定稿Ⅱの原稿用紙一枚の写真版が掲載されており、さらに二〇二四年一〇月から山梨県立文学館公式HPのデ

デジタルアーカイブによって当該資料 (<https://digital-archive.prefyamamashi.jp/database/detail/216> 閲覧日：二〇二四・一一・二〇) がカラー画像で閲覧できるようになったので参照した。未定稿Ⅰの六枚目を翻刻する。

発展する機会を促進した。□□鉄道は県庁の／ある××市を浅井に繋いだばかりで〔は〕ない。同／時に又彼は十五里を隔てた東京をも浅井に繋いだのである。その為に浅井は穂麦の間に白／じろと信号柱の聳えた後、見る見る倉橋全郡／の農産物を聚散する中心となり、明治三十五／年頃にはもう其処此処に瓦屋根も見える一か／どの大村落に変わつてゐた。わたしの読者に紹／介したいのは丁度この前後の浅井〔村〕である。新／聞屋、宿屋、運送屋、——さう云ふ店は建ち／

未定稿Ⅰは、同じ書き出しながら余白を残すことなく書かれ、七枚目へと続いている。訂正された言葉を比較しても、[T0022137-9]の方に直が多い。未定稿Ⅰの五枚目の次に[T0022137-9]へと書き進んだが、続きが思うように書けなかったため、新しい原稿用紙(未定稿Ⅰの六枚目)に最初から書き直したと考えるのが妥当だろう。さらに八枚目には、「読売新聞」の一記者」による「××遊記」に「桑畑のかなたなる小学校さへペンキ塗りならざるは嬉しからずや」と記された挿話が描かれ、[T0022137-9]の末尾にあった「ペンキ塗りの門のある小学校」という記述が変奏されている。現在確認することができる「美しい村」未定稿類は全て

松屋製青色罫二〇〇字詰原稿用紙だが、この二資料が使用している原稿用紙は、下部の「SM」の文字並びも同じで、日本近代文学館所蔵の「その他の断簡」に分類された「美しい村」断簡の原稿用紙とは微妙に異なる。未定稿Ⅰの一枚目は、芥川自身による「美しい村」のタイトル入れと署名もあり、未定稿ながら、十分に構想を練った上で書き始めていた可能性は高い。市原善衛『芥川龍之介 房総の足跡』（文芸社、二〇〇六・五）は、新版『芥川龍之介全集 第二十三卷』（岩波書店、一九九八・一）に収録された芥川の手帳の「美しい村」構想メモ、日本近代文学館所蔵の他の「美しい村」未定稿三枚 [T000064]、そして「美しい村」着想の源泉となった芥川旧蔵書の石田濱吉編『志士之血涙 八街紛擾史料』（非売品、一九一〇・四・七）[A1470]を検討し、本書に引用された白鳥秋畝「危き八街村」（『社会新聞』一九〇八・三・八）を原紙に当たり紹介して大変参考になる。本書はまさに八街村における地主・村長側の搾取と村政の混乱、小作人側の村会議員を立てての反抗と新村長擁立、その後の抗争の曲折の過程を生々しく記録し、本書を入手した芥川が一九二四年二月二二日に八街へと取材旅行を決行するきっかけとなったが、旧蔵書を調査したところ、五頁と一一頁の二箇所の上にペン書きで横線が引かれていた。

試みに、錦島其他本村に土着せるものの所有地二千六百八十丁歩が、毎戸十丁歩を私有する中農二百六十八戸に分配せられ、是等の者が悉く本村に居住するものと仮定せんか、其多くは皆所得納税者た

るべければ、これを最小限に見積もるも、尚且所得税に対する村税付加は、五百余円を得べくして、實際は千円内外にも昇ることならん。此一時に徴しても、本村納税力の大部分が、土着ならざる大地主の犠牲に供せられつゝあるの事實は明瞭なるべく、換言すれば、本村細民の汗より出たる、粒々辛苦の收穫物は、土地の肥料にならずして、常に他に奪ひ去らるゝものにして、明治四十一年三月八日付社会新聞は、「危き八街村」の題下に、克く其消息を伝へて曰く。（五頁より引用）

「……」是等の報告提出に關し、官規によれる郡役所の厳しき督促さへも、退けて顧みざる位なれば、紛紛たる村民苦情の如き、彼等に於ては馬耳東風も啻ならず、甚しきに至りては、役場が俸給を支払はざるため、米屋が納税切符を貰ひ、自身村税を徴集し、教員の売掛け代金を差引く等、奇怪の事さへ行はれ、役場員が徴集したる税金を収入役に納めざる如き、本村にありては常套事となり、「……」（一一頁より引用）

五頁は鍋島侯爵家が不在大地主であるために起こる搾取の仕組みを明らかにしていく箇所であり、一一頁は地主側に牛耳られて村役場が機能しない状態を克明に描く箇所である。市原善衛は前掲書で、「小説『美しい村』は「志士の血涙 八街紛擾史料」（当時の村長が公金横領で裁判にかけられた時、村長を弁護する側に立つて書かれたもの）を基に書かれたとされているが、この冊子からは『美しい村』のイメージが湧いてこない」と指

摘している。ただ、最もまとまりのある未定稿Ⅰ（及びその関連未定稿である「T0022137-9」）は、冒頭に「浅井は美しい村である。いや、今は村ではない。今上天皇の御即位と共に町制を布いたと云ふことである。同時に又美しい昔の景色も大半は失はれたと云ふことである」とあり、あくまで、「○美しい村／Proletariatの群に加はりつつ　しかもProletariat出ならざる事を苦しむloneliness」という「手帳8」のメモ（新全集第二十三巻）で示された登場人物が現れ活躍するまでの前置きと考えた方がよいだろう。

山梨県立文学館所蔵の未定稿Ⅱには、「浅井村の大地主の奥村崑右衛門」の元に東京から「薄赤い紙に刷つた」「黎明新聞」が届くという一節が記され、日本近代文学館所蔵の「『美しい村』断簡」計四枚のうちの「その他の断簡」一枚[0003.jpg]には、「浅井第一の大地主だつた」父・清兵エに「激しい軽蔑を感じ」る子・清太郎が配されている。『志士之血涙 八街紛擾史料』に記録された「紛擾」を題材に「美しい村」が構想されていたことは、「手帳8」と照らし合わせればほぼ確実であろう。

なお、元版全集では「大正十三年頃」と推定されていた「美しい村」の執筆時期が、普及版全集では「大正十四年頃」となり、その後も踏襲されている。『資料集』の海老井英次「解説」は、「確定は出来ないがこの方が妥当」とし、「八街への実施調査の成果か、「浅井村」の描写も具体的であり、新しい文体の創出も考えられる」と評価する。農民文学に数えられた「一塊の土」（『新潮』一九二四・一）の好評を受けての二月の八街取材であったと思われるが、清兵エ・清太郎父子の立ち位置や経済構造を組み込んだ俯瞰的な叙述など、僅かな

がら「玄鶴山房」(『中央公論』一九二七・二、二)へと接続する側面もあり、また構想メモからプロレタリア文学を意識していたと推測されることから、取材後、ある程度の構想期間を経た一九二五年前後に本資料を含む現存の未定稿の箇所が執筆されたと考える方が腑に落ち易い。

それでは、本資料の裏面に記された『思想』六月号とは、どの年の六月号だったのだろうか。八街取材日以前ということはないので、一九二四年から芥川生前の一九二七年までの四号分を調査したい。葛巻への指示には「年」を記していないので、指示した直近に刊行された六月号のはずである。

【一九二四年六月号】

「カント」「判断力批判」の成立に関する考察(承前) 大西克礼

「天平時代に於ける奴隷の価格に就いて」 瀧川政次郎

「貨幣概念に付て」 土方成美

「ヘルマン・コヘンに於けるカント解釈の発展(承前)」 伊藤吉之助

「欧羅巴に於ける東洋美術研究の課題と方法」 グラーゼ

「哲学者としてのデイルタイ」 三枝博音

【一九二五年六月号】

「対象の超越性」西谷啓治

「ダーウィン以後」松浦一

「オスカ・ワイルド」工藤好美

「ゲオルグ・ブランデスの講演『今日の欧羅巴』」上野直昭

「坂口博士の『世界に於ける希臘文明の潮流』を読む」山谷省吾

「オイケン教授よりの来信」

【一九二六年六月号】

「原始仏教の根本的立場（下）」和辻哲郎

「幾何学と空間」戸坂潤

「民謡としてみたソロモンの歌（二）」土居光知

「文芸学上の新潮に就て（下）」雪山俊夫

「彫刻十個条」高村光太郎

「ヘーゲルの学位論文についての穿鑿」矢崎美盛

「オーレよりトロニムまで」安倍能成

【一九二七年六月号】

「人間学のマルクスの形態」 三木清

「歴史と摂理」 三谷隆正

「ケーベル先生の五周年に」 橘系重

「十六世紀末に於ける澳門及び日本の活字出版」 岡本良知

「芭蕉俳諧研究」 山田孝雄、阿部次郎、小牧健夫、村岡典嗣、小宮豊隆、太田正雄、土居光知、岡崎義恵

「外遊漫想（二）」 藤原咲平

「アテーネの散策」 安倍能成

「しづかな流」 中勘助

一九二四年六月号は、八街への取材から数箇月しか離れていない時期だが、次の六月号が出るまでには一年の間隔があるので、その間に「美しい村」の未定稿が書き進められていた可能性は十分にあるだろう。大西と伊藤の論文は共にカントに関わる。一九二四年四月はイマニユエル・カント生誕二百年に当たり、『思想』四月号はカント特集を組み、桑本巖翼「カントの自然観」をはじめ一〇本のカント関連論文が並んだ。一九二四年六月号に掲載された論文は「（承前）」とあるように、四月号の特集に掲げられた論文の続きである。芥川は「明日の道徳」（『教育研究』一九二四・一〇）の元になった講演を「大正十三年六月十日 第二十二回全国教育

者協議会にて」行ったことが確認できるが、本講演において、芥川は新カント派のヘルマン・コーエンを研究していた旧友・藤岡蔵六を引き合いに出しながら、以下のように述べている。

「…」斯る例を挙げますれば、幾らでもあります。私の友達に哲学をやつて居る男があります。其の男は大学の卒業論文に、カントの純粹理性の批判を書いた位で、ひどくやかましい事ばかり云つて居る男であります。其の如何にやかましいかと云ふ例証は、或時私に向つて君僕にどうしても分らないものは、待合といふもののフンクチオオネン（作用）だと云ふ。それは分らなかつたに違ひない。其の男に四五日前に会ひましたら、兎に角カントの研究者でありますから、談直にカントに及びました。私はカントを読んで居りませぬ。しかしカントの事を書いた物は読んで居ります。従つてカントの書いた物も読んで居る位の顔はして居ります。而して色々議論を上下して居りましたら、友達の言ふには、僕はカントの良心の絶対命令に疑問を持つ、どうも吾々の倫理的の態度から、幸福とか快樂を除いては考へられない。さう云ふ事を捨てる事は人間的でないやうな気がすると云ふ。此の人さへ此の言のある事は、滔々として天下が今日迄、個人主義の道德の潮流に押流されてゐる証拠でないかと思ひます。

芥川文庫に所蔵されているドイツ語文献では、学生時代の桑木の授業でテキストに使用されたと思しき

Jonas Cohn, *Führende Denker : geschichtliche Einleitung in die Philosophie: 2. durchgesehene Aufl* [Leipzig, Teubner, 1911] にカントを扱った章がある。また、コーエン／藤岡蔵六訳述『コーエン 純粹認識の論理学』(岩波書店、一九二一・九) も出版されており、関口安義が『悲運の哲学者―評伝藤岡蔵六』(イー・ディー・アイ、二〇〇四・七) で取り上げたように、『思想』は、和辻哲郎による藤岡の翻訳への激烈な批判と藤岡による弁明の舞台ともなった。藤岡とカントを話題にする機会もあっただろうし、本講演のためにカント特集の四月号に目を通そうとする可能性もあったかもしれない。ただ、専門性の高い論文を三号にわたって継続して読むモチベーションを芥川が持ち合わせていた可能性は、本講演でカントの道德観に触れた量の少なさからも極めて低いように思われる。他の論文については、例えばデイルタイは学生時代に大塚保治から学んでいるものの、この時期の芥川との関連は管見の限り見出せなかった。

一九二五年六月号には、工藤好美「オスカ・ワイルド」が載っている。工藤「一八九八―一九九二」は早稲田大学文学部英文科出身であり、東京帝国大学英文科出身で『思想』に執筆機会が多かった土居光知「一八八六―一九七九」と懇意であった。芥川は宮沢虎雄宛一九二〇年五月二五日付書簡(下書き)で土居の「日本文学を通じて見たる文化の展開」(『哲学雑誌』一九二〇・四)を評価しており、英文学者の論文に注目することもあった。本論文は三九頁分もある本格的なワイルド論で、マシュー・アーノルドやワイルドの師であったウォルター・ペイター、さらにラファエル前派を参照しながらワイルドの文学・思想の特質を捉えて

いく。特に以下の二点から、芥川が読んでいた可能性が考えられる。

第一に、工藤論文では、五頁分に及ぶ「サロメ」の解説があり、「サロメ」は真の意味における傑作であると高く評価している点に注目したい。その続きを引用する。

「……」ドオリアン・グレイの画像」はそれが新奇であることをやめた時には読まれなくなるであらう。「意向論集」はその逆説が正統の理論になった時存在の理由を失ふかも知れない。けれども「サロメ」は劇の興味が人の心を去らない限り一つの完成した古典として読みつゞけられるであらう。この劇のなかには情熱の暴風雨^{あらし}がある。一度この暴風雨に触れる者、彼等は自ら手を下して死ぬか、兵士の重い楯の下に押しつぶされるほかない。

この論文が発表されてから二箇月後、芥川は『女性』八月号に「サロメ」その他」を発表している。「一」「サロメ」——「僕等」の一人久米正雄に——」は、『梅・馬・鶯』（新潮社、一九二六・一二）に「Gaiety座の「サロメ」——「僕等」の一人久米正雄に——」として独立して採られた。なおGaiety座は、一九二三年九月の関東大震災で倒壊している。拙稿「芥川文学の一人称複数〈僕等〉を読む——「海のほとり」の〈僕〉と〈M〉を基点に——」（『日本文学』二〇二三・一）で詳述したが、一九二二年一月九日から始まったアラン・ウイ

ルキー一座によるGaiety座での「サロメ」日本初演を、一高生だった芥川は久米正雄、井川「恒藤」恭、石田幹之助の四人で観ており、その当時の記憶を振り返る内容になっている。井川は観劇直後、故郷の『松陽新報』に「サロメ」（一九二二・一一・二〇～三〇）を連載し、『向陵記——恒藤恭 一高時代の日記——』（大阪市立大学、二〇〇三・三）にも収録されているが、冒頭では、「それは十日ばかり前の一と朝、寮の室で読書して居ると、家から出て来た龍之介君が入つて来て、「君、あの今度来る英国の俳優がね、サロメを演るんだつて！」と息をはづませて言つた」と始まり、井川が「君行くの？」と訊くと、芥川は「行く」と決然と眼を輝かした」と続く。観劇後、井川は「オスカアワイルドがたへにもゑがき出したまぼろしの美の郷」と感嘆し、「脚本中のユウペルソンヌであつたSalomeはその夜から生ける女性となつて僕の心に宿つた」と締め括る。一方、芥川は観劇から一〇年以上を経た「サロメ」その他において、最初は様々に幻滅しながらも、年配の女優にアンデルセン／森鷗外訳『即興詩人』（春陽堂、一九〇二・九）のアヌンチヤタを重ねて「羅曼主義」が鼓舞されていった記憶を綴っていく。期待通りではなかったが、それゆえに一層、「僕のいつになつても忘れることの出来ないのはあの年をとつたサロメである」と、「サロメ」劇との初接触を、青春時代、「羅曼主義の世界に見入つた体験の中核に据える。同じく英文科出身の久米正雄への目配せがある小品がこの時期に書かれた理由として、稿者は工藤論文に触れた可能性を考えたい。

傍証となるのは、芥川はサロメに首を望まれた預言者ヨカナンを、「サロメ」その他」では忠実に英語発

音で「ジョカナアン」と記した点である。そもそもワイルドは「サロメ」をフランス語で発表し、パートナーのアルフレッド・ダグラスが英訳しているが、ドイツ語訳からの鵬外訳「サロメ」（『歌舞伎』一九〇九・七・九）にしても、同時代文献を国立国会図書館デジタルコレクション等で探しても基本的には「ヨハナアン」「ヨカナン」「ヨカナーン」「ヨカナアン」が多いなかで、「ジョカナアン」は管見の限り、英文学者の厨川白村「わかき芸術家のむれ」（『三田文学』一九一三・一、後に『厨川白村選集 第三卷 文芸評論』厨川白村選集刊行会、一九二五・九）では使用されていたが、非常に珍しい用例と言える。また、芥川と観劇直後の井川の文章では、連載中の表記の揺れも含めて挙げれば、「ヨハネ」「ヨハナン」「ヨハナアン」「ヨハナナン」だが、一方、工藤論文では英語発音の「ジョカナアン」が八回使われており符合する。芥川は学生時代に集中してワイルドを読んでいたが、『女性』一九二五年八月号において、急に一高時代の「サロメ」観劇を話題にするためには、発表直後の工藤論文のようなきつかけを想定した方が自然ではないだろうか。

第二に、工藤論文には以下のような箇所がある点に注目したい。

「デ・プロフンディイス」の基調をなすものは悲哀——殆んど人格化されて大文字で書かれるほどの悲哀——である。我々はこの悲哀の要素が、宛も詩に於ける畳句のやうに、一定の距離をおき、常に同じ深さをもつて、一篇を貫いてゐるのを見る。そしてこの間を点綴するより明るい、花やかな、表面に浮び出

た要素としては、我々は其処に、常に悲哀と不思議な一致をなす、浪漫主義の総べての意思を持つ。

「…」悲哀のあるところ必ず聖地があり、悲哀こそは総べてのよい芸術の範型であり、同時に試金石である。ワイルドは今この悲哀の霧をとほし、悲哀の洗礼を受けて浄められた魂をもつて、基督の生活に近づかうとする。基督は、ワイルドにとつて、彼の浪漫主義の冠たるものである。

彼は基督の性質の根底が芸術家のそれと同じく、強い焰のやうな空想であり、事実、彼の位置は詩人と伍すること、のみならず彼の生活そのものが全く詩——殿堂の帳は裂け、闇は遍く地を蔽ひ、石は墓の門まで転び出るといふ恐ろしいその最後にも拘らず、さながら牧歌——であることを認める。「…」

芥川文庫には Oscar Wilde, *De profundis*, 15th ed. [London, Methuen, 1911] (邦訳『獄中記』) が収められているが、学生時代以降に集中して読まれたかどうかは判然としない。しかし、工藤論文が捉えたワイルド像に一貫する「浪漫主義」の一語は、当てられた漢字は異なるが、まさに屈折を加えながらも芥川が「サロメ」その他」に用いた鍵語であるし、最晩年の「西方の人」において、「クリスト教はクリスト自身も実行することの出来なかつた、逆説の多い詩的宗教である。彼は彼の天才の為に人生さへ笑つて投げ棄ててしまつた。ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を発見したのは当り前である」(「18 クリスト教」と捉える理解に近接している。また、「ヨハネの首を皿にのせたものは残酷にも美しいサロメである」(「34 クリストの友たち」

という一節も組み込まれている。兼武進「芥川『西方の人』の「ロマン主義者」について——ワイルドとの比較による覚書——」（『桃山学院大学人文科学研究』一九八一・五）は、「芥川は『西方の人』を書くに当たってわざわざ『獄中記』の全篇を精読したのではなく」、「青年期に読んだ記憶の揺曳のなか」から現れた「青春の残響」であり、「実質は形骸化あるいは空洞化に近い変容」であったと述べる。無論、「変容」はあったに相違ないだろうが、「いつになつても忘れることの出来ない」「羅曼主義」を、おそらく工藤論文の「サロメ」理解やワイルド像を触媒としながら再確認したことが、「気質上のロマン主義者」（僕は）、『驢馬』一九二七・二）を自任する晩年の創作態度とも繋がっていくのではないか。

また、原稿用紙の表面の執筆時期と裏面の葛巻宛の指示を出した時期には、大きなタイムラグは起きなかったと考えられる。例えば、[T0022137-5]の裏面はトルストイ『戦争と平和』を探す指示だが、表面の断簡は『戦争と平和』を例に用いる「文藝鑑賞講座」（『文芸講座』一九二四・一〇、一一、一九二五・四）の草稿であり、表面と裏面の書かれた時期が離れていない。『思想』一九二六年六月号の土居光知論文や、一九二七年六月号における恒例の座談会記録「芭蕉俳諧研究」も芥川の関心の範疇であろう。しかし、一九二四年二月に取材に行つた後、『志士之血涙 八街紛擾史料』を参考にして「美しい村」の冒頭部分を書き進める時期を考えるとすれば、長く見積もっても二年間、一九二六年六月までには続きを書かない判断はついていたのではないか。なお、一九二六年になると芥川は鵠沼での生活が主になるので、葛巻に田端の家で指示を出す機会は極端に減っていく。

以上の考察から、本資料における「思想六月号をさがされたし」という葛巻への指示の内容は、『思想』一九二五年六月号を指していたと推定する。

注

(1) 葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』（岩波書店、一九六八・二）の「はじめに」において、葛巻は「昭和九（一九三四）年普及版全集を、堀辰雄と編者の二人が主になり、佐佐木茂索氏の後ろ見を受けて、刊行し」と述べている。

(2) 藤沢市文書館『芥川龍之介自筆資料目録（附・葛巻家資料目録稿）』、二〇〇六年三月

(3) 芥川龍之介全集編集委員会「凡例」、『芥川龍之介全集』第二一卷、岩波書店、一九九七年一月

(4) 『女性』の目次では、本作は「創作」欄の筆頭であり、題目「長江」の下には小さい文字で「（小説）」と添えられている。なお、本編の大見出しは「長江 芥川龍之介」であり、柱も「長江（芥川龍之介）」である。

(5) 『芥川龍之介全集』第一九卷、岩波書店、一九九七年六月

(6) 芥川龍之介「長江」、『女性』第六卷第三号、一九二四年九月

(7) 倉敷市編著『倉敷市蔵 薄田泣菫宛書簡集 作家篇』（八木書店、二〇一四・三）によると、当該書簡の

封筒裏に「二月七日」と書かれている。

(8) 注(7)において、当該書簡の日付は「大正十一年二月二日〔年月推定〕」とされている。なお、当該書簡の初出は薄田泣菫「芥川氏の即興歌」(「相聞」改題『スバル』第二卷第一号、一九三〇・一)である。

(9) 薄田宛書簡は注(5)から引用し、注(7)も参照した。

(10) 注(8)に同じ。

(11) 章瑋「芥川龍之介 一九二一年の中国旅行と「奇遇」の虚実——「絹帽子」と「雛」草稿」の直筆資料から見えるもの——」(『芥川龍之介研究』第五号、二〇二一・一〇)において、芥川の旧稿問題を取り上げている。

(12) 芥川龍之介『支那遊記』、改造社、一九二五年一〇月

(13) 注(6)に同じ。

(14) 奥野政元「保吉の手帳から」、関口安義編『芥川龍之介新辞典』、翰林書房、二〇〇三年十二月

(15) 奥付、芥川龍之介『黄雀風』、新潮社、一九二四年七月

(16) 奥付、書誌情報は注(6)に同じ。

(17) 「編輯後記」、書誌情報は注(6)に同じ。

(18) 注(16)に同じ。

- (19) 国土交通省気象庁「東京（東京都）一九二四年七月（日ごとの値）詳細（気圧・降水量・気温・蒸気圧・湿度）」https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/daily_sl.php?prec_no=44&block_no=47662&year=1924&month=7&day=&view=a2 閲覧日：二〇二四年十一月二六日
- (20) 『芥川龍之介全集』第二〇巻、岩波書店、一九九七年八月
- (21) 注 (20) に同じ。
- (22) 注 (20) に同じ。

附記：【図版二】の翻刻を除いた引用は、適宜新字体に改め、ルビを省略した。

謝辞：本資料の閲覧・掲載の許可をいただいた公益財団法人日本近代文学館、画像撮影等にご協力くださった館職員・土井雅也氏に厚くお礼申し上げます。